
グレートランド・マカロニ奇譚

野井 之一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グレートランド・マカロニ奇譚

【Nコード】

N9042Y

【作者名】

野井 之一

【あらすじ】

舞台は開拓時代中期を迎えたグレートランド アスカはそこそこ腕の立つ田舎シェリフだ。ある日、最年少シェリフのチャールズを上司から押し付けられ、彼と共に仕事をする事になったが、彼はなんと扱いきれない屁理屈少年だった！ 組んだ方がいいが、物事に関する考え方がまったく違うせい、すれ違ってばかりでなかなか仕事がつましくない！ 二人は焦りや不満を感じ始める。そんな二人の前に巷で話題のラッキーストライク強盗団のリーダー、フィンが現れ、アスカの周りはめまぐるしく変化していく！ 西

荒野のシルバースター？

広大な面積を誇る、とある大国の『開拓時代』と呼ばれた夢と自由、金と銃が溢れた時代。

これは、そんな時代の歴史の教科書にも載らないような、閑古鳥が鳴く歴史資料館の、古びた資料のはじっこ、たった数行の記述の行間に詰まった物語である。

*

始まりは冷たい風の吹く、暗い日だった。昨日までは風のない温かな陽気だったにも関わらず、今日は風が乾いた土を巻き上げ、視界はほとんど黄褐色に包まれていた。

アスカ・スウィートフィッシュリバーはそんな荒野で砂に怯んでいる情けない愛馬の手綱を引っ張って歩いている。砂嵐から彼女を守るはずのマントはバタバタと音を立てながら煽られ、ほとんど意味をなしておらず、胸元に輝く銀の星が見え隠れしていた。

彼女は砂埃に目をやられ、目に涙を浮かべながらも、ようやく家屋が立ち並ぶ場所までやってくると、馬を馬屋に繋いで建物の中に入ってしまった。

中には少し太った中年男性　マードックが座っており、彼はアスカを見るなり笑って見せた。アスカも柔らかに笑って見せると、マードックの横にあった椅子に座り、上着と帽子、重々しいピストルが収められたガンベルトをテーブルに置いた。

「お疲れ」

マードックはマグカップにぬるい水を注いでアスカに渡した。彼女はそれを受け取ると一口飲んで、ふうと一息ついた。

それから水をかぶった犬のように頭をブルブルと横に振ると、彼女の黒くて長い跳ねっ毛から大量の砂が音を立てて床へと落ちていった。マードックはそれに嫌そうな表情を浮かべることはなく、また、アスカも特に特別な反応を見せることもなく、たわいない会話をしていた。

会話に区切りがつくと、アスカは立ち上がって箒を取ってきて、その砂をそのまま外へと掃き出し、再び椅子に納まった。

「そっいや、連続牛泥棒を捕まえたんだって？」

マードックは興味津々にアスカに尋ねると、彼女は少し照れくさそうに笑って頭を掻く。ふるい落としきれなかった砂が、また音を立てて床に飛散した。

「ええ、マードックさん。なんとか捕まえることができましたよ」

アスカはまた箒で砂を外へと掃き出しながら言った。

「お手柄じゃないか！ 君はシェリフの鏡その物だ！ 私もあと十年若けりゃ、そこらのアウトローにギャフンと言わせてやるんだがなあ！」

マードックは大きく口を開けて豪快に笑い、アスカはそれに「大げさですよ」と控えめに答えた。

彼等はシェリフだった。

広大な大陸全てを国土とする、巨大な国 『グレートランド』をいくつかに分割した『州』、またはそれをさらに分割した『町』、『村』と呼ばれる区画間を渡り歩いたり駐在したりして、殺しや強盗などの犯罪行為を行う『アウトロー』から善良な州民を守るのが彼等の仕事だった。

一見、アスカにはそんな仕事が勤まるようには見えませんが、彼女は父が伝説的なシェリフだったこともあって、そこらの男よりは銃の扱いを知っているし、ケンカができないような、しおらしい娘というわけでもなかった。

「さて」

急にマードックが真面目な表情になった。

「お前も一人前になったことだし、そろそろ部下の一人や二人、必要だと思っているのだが……」

マードックはそう言うと、トントンと指で机を叩きながら言った。アスカは彼の突然の話にキョトンとした表情を浮かべた。

「部下……ですか？」

アスカは自分の聞き間違えではないかと思い尋ね返すと、マードックは深く頷いた。

「ああ、そうだ。ほら、聞いたことはないか？ 最年少でシェリフになった少年さ。この間の新聞に載っていた……」

最年少でシェリフになった少年　アスカは数日前に新聞で読んだ記事の内容が頭を過ぎった。

なんでも、神童と呼ばれるほどの頭のいい少年で、しかも州の有力者の推薦もあって、十五歳でシェリフになった　そんな感じの内容だったはずだ。

「その人が私の弟子に？」

「ああ、そうだ。他の者には子守りは職務外だと断られてしまったね。かといって、ほら……『アイツ等』に任せるっていいのはありえないだろう?」

マードックが少し不快そうな表情を浮かべて言った『アイツ等』というのはシェリフという立場を利用して、アウトローに手を貸したりするような素行の悪いシェリフのことだった。

シェリフは拳銃の実力と少しでも権力のある人物からの推薦さえあれば就業できるために悪人がシェリフになってしまふことは珍しくないうえに、その数は少なくなかった。

また、彼らのような存在が、州民のシェリフに対する感情を日々悪くしている原因でもあるゆえにマードックのような真面目で誠実なシェリフは彼らと常に睨み合っていた。

ともかく、アスカは少し悩んだ。

マードックの頼みを断ったシェリフたちの意見にアスカ自身も賛同するし、シェリフの仕事はアウトローを捕まえることで、安全な仕事であるとは言えない職業だ。今日の馬泥棒を捕まえるときも銃撃戦があったのに、そんな場所に子供を連れて行って使えとも思えないし、なにより危険だ。

アスカはどうにかして断れないものかと考え込んでいた。

「あの、その少年には事務所の仕事をやらせてもらっていいのはどうでしょう? 頭のいい少年であれば処理も早い、きっと適任でしょう?」

アスカの提案に、マードックは首を横に振った。

「その少年は物好きなことに『現場』をご所望でね」

シェリフというのは実力と推薦があればなれるが、初めは地元の

シェリフ事務所の雑用から始まり、ある程度の荒事を経験した後、事務と駐在専門のシェリフか巡回専門のシェリフになる。アスカのように巡回シェリフになれば実力のあるシェリフの助手になって色々経験させられる。

それが終われば自分の意志で仕事をすることが許される。一人、もしくは仲間と狭い範囲を移動する。村から村、町から町。実績をあげるほど任される範囲は広がり、最終的には州間を移動する仕事を任される。希望すれば本部の仕事に移ることさえ可能だ。

この仕事は実力主義だ。だから入ってきたばかりの、しかもまだ実績の一つさえあげたことがない子供がいきなり重要なプロセスを抜かして『現場』の職務につくことはない。アスカだって、ほかのまっとうなシェリフだって、最初は雑用から　そうして『今』があるのだ。

「マードックさん、その少年を優遇しすぎなのでは？」
「うーむ……実を言うと、『例の少年』の親御さんは……その、あれだ……私たちに色々便宜をはかってくださっている方のご子息なんだ。だから、その……」

ああなるほど。

アスカは納得した。納得はしたが、子供の面倒はごめんだ。だが、『アイツ等』にまだ純粋な子供を預けるくらいなら、アスカは定年間近の彼の頼みをきくことにした。

それに、きつと、その少年はヒーローになりたいだけなのだろう。一度くらい銃撃戦を経験すれば、泣いて両親のところに戻るに違いない。そう思ったからこそ、引き受けようと思った。

「分かりました。その少年は私が預かります」

アスカは嫌そうな表情をできるだけ表に出さないようにしながら、

席を立ってガンベルトに銃を入れると、帽子と上着を持って、それぞれと外へ出て行ってしまった。

2011・11・27

荒野のシルバースター？

外は相変わらず酷い砂嵐で、アスカは下を向いて砂から目を守り、別の建物に入って行った。

今度、アスカが入ったのは酒場だった。この砂嵐のせいで商売になっていないと思ったが、中は賑やかで、酔っ払い同士が大声で自慢話をしていたり、カードゲームをしていたり、音楽に合わせて踊る男女がいる。

アスカはそれらを微笑ましく思いながらカウンターのほうまでやってくると、椅子に座った。

すぐに髭をたくわえたバーテンダーが彼女の目の前までやってくと、アスカは『緑茶レモネード』を注文した。バーテンダーは少し嫌そうな表情を浮かべはしたが、すぐにそれを持ってくると、アスカの目の前にドンと乱暴に置いた。

「ちよつとオ、酒場に来て、ジュースなんて頼むなんて、どうかしてるんじゃない？」

横にフリルたっぷりの派手な赤いドレスを着た女性が座ってくると、アスカはバーテンダーを手招きして、彼女にお酒を持って来るように言った。

彼女はキャサリン。いつも派手なドレスを着て、化粧もばっちりしていて、とても派手な人物だ。アスカと似たルーツで町から町へ、村から村へと渡り歩いているらしく、何度も顔を合わせていた。

「こんばんは、キャサリンさん」

アスカが挨拶すると、キャサリンは少し嫌そうな表情を浮かべて、

バーテンダーが持って来た酒に礼の一つも言わずに口をつけた。しばらく二人は黙っていたが、そのうちキャサリンはアスカに向き直った。

「アンタがここに来たってことは、何か情報欲しいってことオ？」
「私にだって仕事を抜きで楽しみたい時もありますよ」

疑り深い目でアスカを見ながらキャサリンが尋ねてきたので、アスカは苦笑し、グラスを傾けながら言うと、キャサリンは「あっそ」と冷たくあしらった。その後、キャサリンは急に顔を赤らめさせて、そわそわとした。

「あのさア、アンタ、ラッキーストライク強盗団の最近の動向について何か知らない？」

ラッキーストライク強盗団。

アスカは記憶を辿ってはみたが、その名前に心当たりはなかった。そもそも、強盗団なんてものは小から大まで、情報が集約される本部でさえ数が把握しきれないほどあるのだ。

「さあ、新手的強盗団ですか？いきなり言われましても……強盗団は星の数ほどありますからね」

「ラッキーストライク強盗団を知らないの！？　っていうか、彼らを他の強盗団と一緒にしないでくれる！？」

キャサリンは呆れているというよりは、顔を真っ赤にさせて怒ってみせた。アスカはなぜ彼女が怒っているのかわからなかったが、彼女を怒らせるほど有名な強盗団にはシェリフとして興味があった。

「キャサリンさん、その強盗団についてお話を聞かせてもらっていますか？」

「いいわよオ、でもそうねエ、ビールシチューともう一杯お酒を奢ってくれるなら教えてあげなくもないわ！」

シエリフの給料は高くはないのだが、アスカは彼女の要望どおりバーテンダーにそれらを注文すると、キャサリンは『つまらない奴』と呟きながらカウンターにひじを突いた。

「まア、約束だから教えてあげるわ。ラッキーストライク強盗団はねエ、隣の州で暴れに暴れまわった強盗団なの。銀行強盗で失敗知らずでエ、昨日も銀行強盗してエ……あ、でもその後で列車強盗もしたのよ！」

「やっかいですね。その、リーダーのこととかが分かります？」

「知ってるわよオ、フィンのことね……なアによオ、彼を捕まえる気イ？」

フィン。

それがリーダーの名前なのだろう。本名なのか偽名なのかは分からないが、重要な手がかりなのはたしかだった。

アスカはメモ帳とペンを手に、キャサリンが喋っている内容の要点部分だけ書き出していた。キャサリンには手帳に何が書かれているかは分からない様子だったが、アスカが書いている内容の予想はできているらしかった。

「いえ、こちらの州に入ってきたら捕まえますが、入ってこないのであれば私に捕まえる権限はありませんから……」

「ふうん……まア、アンタみたいなへなちよシエリフじゃあ、到底捕まえられないような人だけどオ……まあ、いいわ。そオね、一言で言い表すなら、イイ男よ」

キャサリンはうつとりとした表情で言った。アスカはリーダーの特徴を聞き取るうと身構えていたのに、彼女の口からは抽象的な表現が飛び出してきたので、「は？」と怪訝そうに眉をひそめた。彼女はそれを不快に思ったのか、「オシヤレなの！」と怒鳴った。

「できればもつと具体的な特徴を教えてください……」
「んもう！アンタってほんと、想像力つてもんが無いのね！強盗ですってという雰囲気はないの！あと、田舎者って感じじゃなくてエ……」

再び彼女の口から抽象的な表現に、アスカは少し苛立ちを覚えながらペンを走らせていった。

「髪と目の色は？」
「力強そうな茶髪ねエ、目は海みたいに深い青でキレイなのっ！」
「力強い茶髪？海を見たことが……？」
「アンタってホント、バカね！アンタが具体的について言うからこっちは親切心で教えてやってんのよ！……まあいいわ。あとはねえ、おっきな銃を持つてるの！すごいよ！すっごく遠くにあるリンゴを撃ち抜くのよ！」

キャサリンが指を折って手を銃に見たてると、アスカの胸を「バン！」と撃ち抜いた。
アスカはそれをぼんやりと見ながら頭の中で、できればこの強盗には来て欲しくないと思っていた。アスカは銃撃戦に自信がないわけではなかったが、遠くにあるリンゴを撃ち抜くような相手に勝てる自信は全くと言っていいほどなかったのだ。

「隣の州で暴れに暴れまくったからア、今は逃走中なのよ。もしか

したらコッチに来るかもって噂があつてねエ……。ねエ、もし来た
って分かったら、すぐにアタシに教えてよ」

ようやくビーフシチューが到着すると、キャサリンは舌なめずり
をしながら手のひらをすり合わせ、彼女の見た目からは想像できな
いほど豪快にスプーンでシチューを食べはじめた。

アスカはそんな彼女をしばらく眺めながら、そろそろ宿をとって
寝ようと代金をカウンターに置いて酒場から出て行った。

冷たい夜風が頬を撫でる。

明日になったらそのラッキーストライク強盗団とやらの情報を読
覧しに保安官事務所に行こう。アスカはランプの灯る宿に入ると、
一部屋とり、案内された部屋に入るなり鍵を閉め、ガンベルトをベ
ッドサイドに置くと、硬いベッドに倒れこんだ。

とても疲れていたらしい。アスカはあつという間に眠りについた。

荒野のシルバースター？

目が覚めると外はすでに日が昇りきっていた。アスカは身なりをそれなりに整えて、ガンベルトを腰に装着すると軽い足どりで保安官事務所のほうへ歩き出した。

保安官事務所ではマードックが書類と睨めっこをしている。アスカはそんな彼に「おはよう」とフランクに挨拶すると、彼は書類に目を落としたまま「おはよう」と返した。

「いいところに来た。もうすぐ『例の少年』が来るぞ」

マードックはさらりと言った。あまりにそっけなかったので、アスカはそれを一瞬間き流し、彼の目の前を通り過ぎた後、困惑の表情を浮かべて彼に振り返った。

「なんか色々急じゃないですか？」

アスカは疑うようにマードックに尋ねると、彼は「そうかね？」とこちらを向きもせず尋ね返した。彼女は軽くあしらわれて、少し頭に来たのか、彼の机の前までやってくると、バンと机を叩いた。

「何もかもがスムーズにいきすぎですよ。昨日の夜に少年の話聞いて、その少年がもうすぐ来る。何もかもがスムーズ過ぎです！」

「いいことじゃないか。何もかもスムーズ。全く無駄がない。時は金なりって言うだろ？」

アスカは何も言えずにマードックを睨んでいると、馬車が一台、

事務所の前に停まった。金持ちが乗るような立派な馬車に、アスカは彼らが強盗か何かに遭ったのかと外に飛び出し、手綱を握る御者に「どうしたんですか!？」と尋ねると、御者は涼しい顔で御者台から降りて、馬車の扉を開いた。

「到着いたしました。チャールズお坊ちゃん」

中にはキラキラした金髪、空色の目に品の良さそうな顔の少年が背筋をピンと伸ばして座っていた。彼は流行のデザインを取り入れた質の良い服を着て、いかにも育ちの良さそうな少年だ。

「ご苦労様です」

少年は彼のすぐ横に置いてあった長細い包みと、大きな革靴を手にとって馬車から降りてくると、真っ直ぐアスカを見つめた。

「こんにちは」

そこで彼が最年少シェリフであるということに、アスカはようやく気づいた。

彼は本当に子供で、育ちも良さそうで、シェリフには向いていないと思った。だからこそ、彼にはつきりそう言っ、家に帰すべきだと思ったが、彼があまりに堂々としていて、しかも、他人に何も言わせない雰囲気のアスカは結局、何も言えなかった。

「僕はチャールズ・デュラントです」

チャールズと名乗った少年はアスカに手を伸ばし、握手を求めた。アスカはそれに応え、ぎこちなく微笑んだ。

「私はアスカ・スウィートフィットシュリバー。シエリフだよ」
「バッジを見れば分かります。長い苗字ですね」

彼はアスカの胸に輝く星型のバッジを指差して言った。アスカは彼になんて返せばいいのか分からず悩んでいたため、二人の会話はそれっきり続かなかつた。

お互い黙っていると、事務所からマードックが出てきて、握手したままお黙り続けている二人の顔を見た。もしかして何かあったのかと心配した面持ちだったが、そのうち二人は手を離すと、アスカは無表情のまま口角だけ持ち上げた。

「よろしくね、チャールズ」
「はい」

また沈黙が流れたが、マードックは豪快に笑って見せると、「一緒に仕事をするんだからお互い良く話せ」と二人の背中をバンバン叩いて、酒場のほうへ歩かせた。アスカとチャールズは彼の指示通りそのまま酒場に入るとカウンター席に座った。

バーテンダーはいつものようにすぐこちらに来ることはせずに、二人に気づかないふりをしながらグラスを磨いていた。

「えっと……シエリフの仕事についてなんだけど」
「巡回するシエリフと、事務所に留まるシエリフに分かれるんですよ。前者がアウトローを追いかけて、後者が情報収集・処理を行う。それくらいなら僕は知っていますよ。もし、これより重要な情報があるなら、それを教えて欲しいです」

アスカは黙って頷いた。このチャールズという少年はどうも苦手だ。とても大人びていて、感情をどこかに置いてきてしまったような雰囲気がある。

アスカは頭を抱えて、深い溜息をつく、彼は首をかしげた。

「僕が来て、とても残念そうですね」

アスカの心臓が大きく波打った。思っていたことを当てられ、少し動揺しながら、彼女は「そうかな？」と尋ねると、彼は涼しそうな表情を浮かべ、窓の外を眺めた。

「そういう顔をしています。僕が母の期待に添えなかった時、母は今の貴方のような表情を浮かべて、溜息をつきます」

それは悲しい話であるはずなのに、彼は淡々とそう言った。

「僕は優秀です。学校では常に一番です。馬にだって乗れます。僕は自己抑制だってできます。銃だって使えます。何が貴方をそこまで失望させるのですか？」

こんどは少し力がこもった声で尋ねてきた。何が駄目なのかなんて、きつと彼にだってわかつている。彼がまだ子供だからだ。しかし、なんでも一番の彼にはそんな理由が納得できないのだろう。

「正直に言っつて、僕は貴方より優秀だと思います。僕が貴方と仕事をするとすることは、貴方の特になると思えますよ」

アスカは一瞬言葉を失った。それから、彼の言葉に苛立ちを覚え、叱りつけてやろうと思ったが、彼を叱ったところで彼はなんとも思わないだろう。彼女は震えるこぶしを膝の上に置いて、精一杯笑んで見せると、できるだけ優しい口調で言った。

「分かったけど、こっちの指示には絶対従うこと。分かったかな？」

「貴方の指示や判断が間違っている、ですか？」

唇を噛み締めた。反抗期なのか、甘く見られているのか、彼は誰に対しても自分の意見をはっきりと言うのか、ともかくアスカは彼をしばらく見ていた。

「あの、僕は……」

「いい。もういい。とりあえず、今日はお家に帰りなさい」

「帰りません。今日から僕は貴方のパートナーなのでしょう？　だつたら僕は貴方と同じように行動します」

アスカはイスから立ち上がると、チャールズも一緒に立ち上がり、彼女の後ろに立った。アスカはその気配に気づいて振り返ると、深いため息をついた。

「私は帰ったほうがいいと思うよ。あつたかいご飯に、フカフカのベッドは無いんだからね」

「知っています。でも明日から移動するんでしょう？」

「そうだけど」

「なら早く慣れるためにも一緒に行動します」

アスカはやはり嫌そうな表情を浮かべ、そのまま酒場を出て行き、宿に入ると、チャールズに部屋を一つ貸すように女将に頼んで、自分はさっさと部屋に入ってしまった。アスカはベッドに吸い込まれるように倒れこむと、肺いっぱい空気を吸い込み、それを吐き出すと唇を噛み締めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9042y/>

グレートランド・マカロニ奇譚

2011年12月4日00時52分発行